副詞とその統語的位置について

阿　部　幸　一

Adverbs and Their Syntactic Positions

Koo-ichi ABE

It is well known that adverbs can appear in relatively various positions in English. Until now several scholars such as Jackendoff, Emonds, Culicover & Wexler and Keyser tried to explain this matter, but they seem to have failed to account for all occurrences of adverbs sufficiently. As an alternative, we suggest a solution by means of our phrase structure with 'layered' Verb Phrase and Transportability on the strength of Jackendoff (1978)'s analysis.

I. Introduction

副詞は他の品詞と比べ，比較的いろいろな位置に現われることができる。(1)の例では，カッコ内における副詞が，ブランクのどこにでも現われることが示されている。

(1) S Adverb

a. _____, John ____ will ____ have ?? been beaten by Bill, ____. (probably)

b. ____, John ____ has ____ been ?? answering questions for an hour, ____. (evidently)

VP Adverb

c. John has ?? been ____ answering questions ____ for an hour ____. (slowly)

d. John will ?? be ____ finishing his carrots ____. (completely)

Merely−class Adverb

e. John ____ will ____ have ____ been ____ questioned by the police. (merely, simply, scarcely)[1]

今まで数人の学者（例えば，Jackendoff, Emonds, Culicover & Wexler, Keyser）が，こういったことがらを説明しようと試みてきたが，残念ながら，すべての副詞の現われる位置を充分に説明できたとは思われない。そこでまずはじめに，先人の欠点を指摘し，次に我々の代案を提示したいと思う。その前に，(1)のデータからわかる事実を考えてみよう。S adverbとよばれるものは，比較的自由に現われる，といっても動詞句内には現われない。VP adverbは逆に動詞句内に限られるようである。又，merely-class adverbは，助動詞間に現われるようである。こういった事実をふまえて，先にあげた人達がどのように，これらのことを説明してきたかを考えてみよう。

II. Emonds (1976)

Emonds (1976)は，その前作のEmonds (1972)とは，ほとんど副詞に関しては変っていないので，ここではEmonds (1976)を取り上げる。

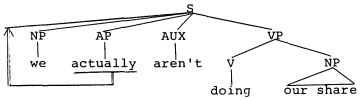
彼によると，形容詞と副詞は特に区別せず，次のような句構造規則のAPの位置に，副詞を生成させている。

(2) S⟶COMP—NP—(AP)—AUX—(EMP)—VP

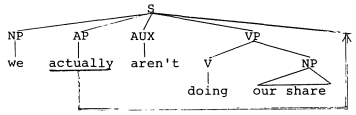
VP⟶(AP)—V—TENSE—(NP)—(PP)—(S)

そして，副詞に対する変形規則として，AP Preposing, Adverbial Dislocation, Manner Movement という3つの規則を考えている。

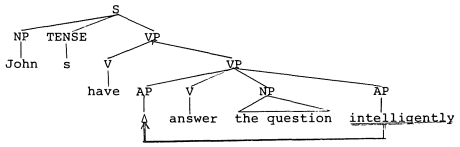
(3) AP Preposing



(4) Adverbial Dislocation

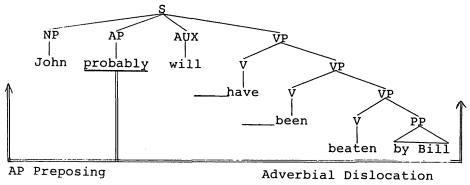


(5) Manner Movement



AP Preposingは，S adverb を文頭へもってゆく。Adverbial Dislocationは，S adverbを文末へもってゆく。Manner Movementは，VP adverb を postverbal の位置からpreverbal の位置へと移動する。しかし，merely-class adverb には，特に変形を設定していない。そこで，はたして Emonds の句構造規則と3つの変形で，すべての副詞の発生を説明できるかという疑問が生ずる。 S adverb について言えば，AP Preposingにより文頭に来ることと，base の位置により主語とつづく第一助動詞との間に現われることと，さらにAdverbial Dislocationにより文末に現われることが記述される。ところが，彼の分析だけでは，S adverb が，第1助動詞と第2助動詞との間ばかりでなく，第2助動詞と第3助動詞との間にも現われることが，説明できない。

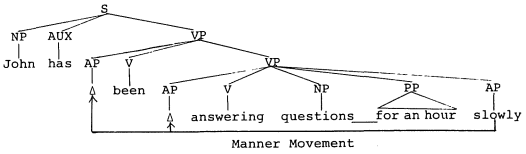
(6) S Adverb



こういった発生を説明するためには，Emonds の体系では，S adverb に対して，さらに2つの変形が必要となる。

VP adverb についてみると，Emonds の理論では，Manner Movement rule により，それぞれの VP の preverbal の位置に現われること，移動される前の post-verbal の位置（詳細は省いて，彼は，VP adverbを文末の PP から派生させている）に現われることが説明できる。しかし，彼の説明では VP adverb が，又 NP とつづくPP との間に現われることが説明できない。

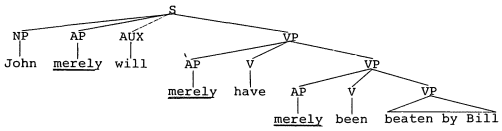
(7) VP adverb



次に，merely- class adverb についてみると（実際は，Emonds の分類では，scarcely-class adverb），特にそのための変形は立てずに，このクラスの副詞は，S と VP に支配されたAP の位置なら，どこにでも現われうると考えている。そこで彼の分析に従えば，次のように一つの文に，merely という副詞をいくつももった文が生成されてしまう。

そこで，こういった問題を解決するためには，merely -class adverb には，1つの深層の位置を考え，変形によって他の AP の位置へ移動されるとすればよいかもしれない。

(8) Merely-class Adverb

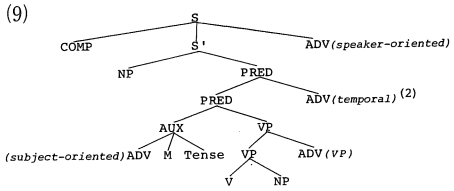


以上見てきたように，Emonds の分析によると，現状のままでは，すべての副詞の発生を説明できないことがわかる。もし Emonds の分析に従がうならば，merely-class adverb の base の位置と共に，いくつかの変形が必要となるであろう。

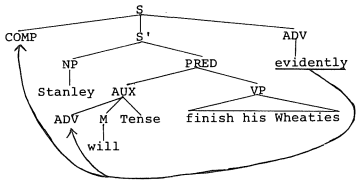
Ⅲ. Culicover & Wexler (1973)

彼らは，(9)のような句構造を(10)，(11)，(12)のような変形で，すべての副詞の分布を説明しようとする。

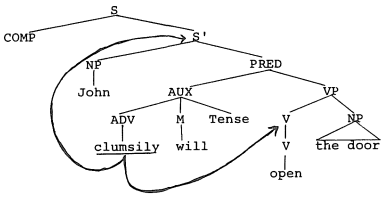
(9)



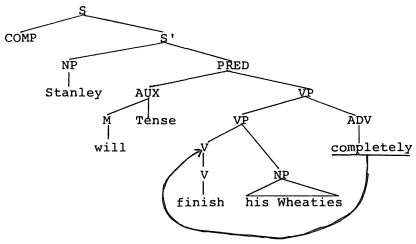
(10) Speaker-oriented Adverb Preposing



(11) Subject-oriented Adverb Movement



(12) VP Adverb Preposing



Culicover & Wexler は Emonds (1976)とは異なり，2つの S adverb に対して，別々な深層の位置と異った変形を考えている。その根拠となるのは，例えば，次の例が示すように，

(13) a. Speaker-oriented Adverb

Evidently, John ate the beans.

John evidently ate the beans.

John ate the beans, evidently.

b. Subject-oriented Adverb

Clumsily, John dropped his cup of coffee.

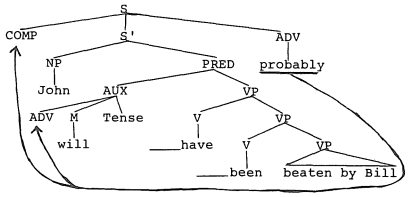
John clumsily dropped his cup of coffee.

?? John dropped his cup of coffee, clumsily.

subject-oriented adverb は，speaker-oriented adverb とは違い，文末には現われないことである。しかし，少し先回り的にはなるが，Jackendoff (1972)でも，このことは気づいていて，彼は解釈規則で，文末の位置における subject-oriented adverb には，解釈を与えないことによって，これを排除しようとしている。どちらの分析がよいかは一概に言えないが，同じ S adverb を同一な規則で扱った方が，このましいように思われる。そういうことを考えにおいて，彼らがどのように副詞の分布を説明するかを見てみよう。

彼らの分析によれば，speaker-oriented adverb が文頭，第1助動詞の前，及び文末に現われることは説明できる。しかし，下の例のように，このクラスの副詞がまた，第2助動詞の前や第3助動詞の前に現われることを，述べることができない。

(14) Speaker-oriented Adverb



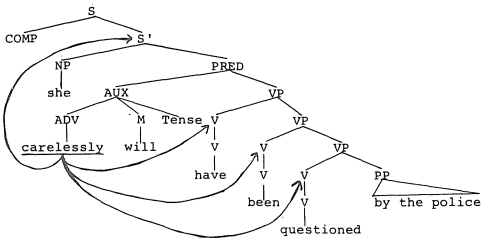
こういった事実を述べるためには，他の変形が必要となろう。

次に，subject-oriented adverb について考えてみると，(15)のような例は，(16)におけるような方法で派生されることになる。

(15) a. ____, she ____ will ____ have ?? been *? questioned by the police. (carelessly, foolishly)

b. ____, John ____ will ____ have ?? been *? beaten by Bill. (carelessly)

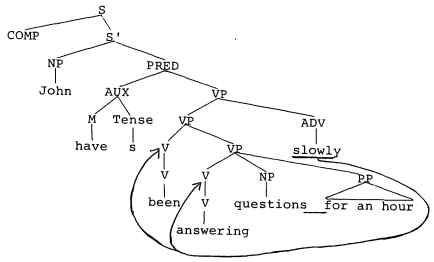
(16) Subject-oriented Adverb



この分析では，??のところはよいにしても，*?のほとんど許されないところの'questioned'という動詞の前まで発生されるのは，overgenerate のように思われる。

VP adverb について見ると，彼らの体系によれば，(1c)の例は(17)の図が示すように，'been'と'answering'の前にくることは述べられる。しかし，この副詞がまた'for an hour'という PP の前に現われることは，予告されない。

(17) VP Adverb



最後に，merely-class adverb についてみると，Culicover & Wexler では，それらに対して句構造規則も変形も立てていないかわりに，本来は PP と思われる temporal adverb に対して深層の位置を設定している。このことは，彼らの分析では，merely-class adverb をはじめから発生できないことになり，明らかに彼らの欠陥となろう。

以上見てきたように，Culicover & Wexler の分析そのままでは，副詞のすべての分布を示すことは不可能であることがわかった。

IV. Jackendoff (1978)

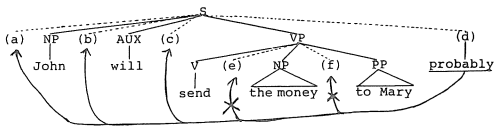
ここでは，紙面の都合で，副詞に関して，Jackendoff (1972) の修正案である，Jackendoff (1978)のみを取り上げる。その修正とは次の2点である：(i) Transportability Conventionが，S adverbばかりでなくVP adverbにも用いられるようになったこと。(ii) strictly-subcategorized adverb（厳密下位範ちゅう化副詞）が subcategorize されない VP adverb とは，異なった深層の位置を与えられるようになったこと。ここで，Transportability Convention（移動可能性の規約）とは，Keyser (1968)の用語

で，次のように述べられている。

(18) Transportability Convention (Keyser, 1968)

This convention permits a particular constituent to occupy any position in a derived tree so long as the sister relationships with all other nodes in the tree are maintained.

(19)



そこで，(19)のような構造が与えられ，この規約にもとづいて，例えば，S adverb である probably が(d)の位置に base からあるとすると，sister 関係を保つかぎり移動できるということなので，それは(a)，(b)，(c)のいずれにも現われることが示される，一方(e)，(f)には sister 関係にないので移動されることはない。このことは正しく事実と相応する。次に，厳密下位範ちゅう化副詞というのは(一般には副詞は下位範ちゅう化されない，つまり，動詞にとってどうしても副詞が必要な成分とは言えないのに対して)，動詞に欠くことのできない副詞で，(20)の例では，副詞をもたない第2の例は許されず，又，その位置は動詞句の後にきまっているようである。

(20) Strictly-subcategorized Adverb

a. John worded the letter carefully.

*John worded the letter.

*John carefully worded the letter.

b. Steve dresses elegantly.

*Steve dresses.

*Steve elegantly dresses.

ここでは，どうしてそういった修正に至ったかという詳細な問題に立ち入る暇はないが，Transportability について言えば，VP と S の adverb を統一的に扱おうとしたのが，今度の修正であり，又，厳密下位範ちゅう化副詞に対して，新しい深層の位置を設定したのも，ふるまいの違う VP adverb と区別するためで，当然の帰結といえる。

それでは，実際の副詞の分布を，Jackendoff はどのように説明しているのかを見てみよう。Jackendoff は，上であげた2つの修正を含め，次のような句構造規則を立てて，説明しようとする。

(21)

$$V''' \rightarrow (N''') - (M''') - V'' - \left(\begin{bmatrix} \text{Adv} \\ +\text{Trans} \end{bmatrix}'''\right)^{*} - (PP)^{*} - (\overline{S})$$

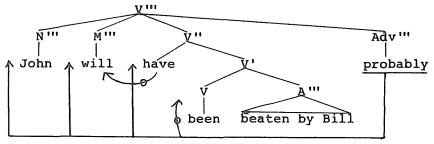
$$V'' \rightarrow (\text{have-en}) - (\text{be-ing}) - \left(\begin{bmatrix} \text{Adv} \\ +\text{Trans} \end{bmatrix}'''\right)^{*} - V' - (PP)^{*} - (\overline{S})$$

$$V' \rightarrow V - (NP) - (Prt) - \left(\begin{Bmatrix} NP \\ AP \end{Bmatrix}\right) - \left(\begin{Bmatrix} AdvP \\ QP \end{Bmatrix}\right) - (PP) - (PP) - (\overline{S})$$

(21)において，V'''はいままでの S に対応する。よって，V'''に直接支配されている副詞は，S adverb ということになり，V''に支配されている副詞は VP adverb となり，V'に支配されている副詞は，厳密下位範ちゅう化副詞ということになる。そこで，[+Trans]という素性は，Keyser に基づいて，sister 関係を保ちうるかぎりどこへでも移動されるということなので，この素性をもつ S adverb と VP adverb のみ移動され，この素性をもたない厳密下位範ちゅう化副詞は，postverbal の位置からは動かされないことになる。

早速，S adverb について彼の分布を見てみよう。

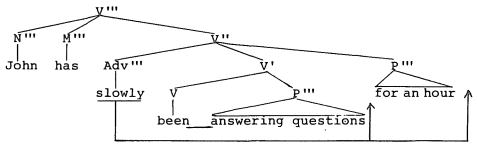
(22) S Adverb



(22)においては，modal(ここでは，will)がある時にかぎって，Have-Be Raising が任意に適用すると，一応 S adverb のすべての分布が説明できることになる。(Have-Be Raising の規則については(30)参照)

次に，VP adverb について見ると，

(23) VP Adverb



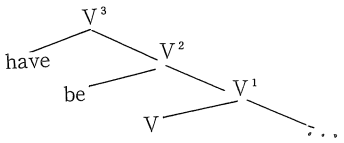
(23)におけるように，V'における前置詞句の前に現われることが，説明できていない。

最後に，merely-class adverb について見ると，Jackendoff は，1972年の分析と同様1978年の分析でも特にこのクラスの副詞には，その存在を認めながらも，その句構造も変形も与えておらず，彼の VP adverb の分布もれと共に，彼の分析の欠陥となろう。よって，Jackendoff (1978) の分析のままでは，事実を正しく記述できないことは明らかである。

V. Solution

前の章で簡単に見てきたように，現状のままでは，いままでのいろいろな人の分析によっては，すべての副詞の分析を説明することはできない。そこで，代案を打ち立てることになるわけだが，その代案の打ち立て方にもいろいろあると思われるが，いままで見てきた分析の中では，一番現実的と思われるJackendoff (1978) の分析を修正するという形で，代案を打ち立てたいと思う。まずその修正の１つとして，Akmajian, Steele, & Wasow (1977)（今後，A,S,&Wと省略）に依るところの“layered V”（層になった動詞句）の分析を採用したいと思う。彼らは，動詞句の体系として，次のような階層になった動詞句の形を提唱している。

(24) Akmajian,Steele, & Wasow (1977,p.8)



こういった構造は，彼らの主張するVP Deletionばかりでなく，副詞の分布にも有効であるように思われる。しかしながら，この構造をそのままJackendoff (1978)の枠組みに組み入れることはできない。なぜなら，A,S, & WのV³とJackendoffのV‴とは同一ではないからである。すなわち，A,S, & WのV³は，単なる動詞句の一番上の階層を示すものであって，当然その上にはSがあることを前提としている。そこで，もしA, S, & WのV³をJackendoffのV‴をSとするX̄ syntaxに入れ込むと，V⁗なるnodeを設定することになる。これには，いろいろ問題がある。１つには，Jackendoffの枠組みでは，プライムの数が最大が３と決められていること，もう１つには，動詞句の一種と化した文を示すV⁗を動詞類だけに認めて他に認めないのは，X̄ conventionに反することになる。そこで以下３つの理由で，V⁗の仮わりにSを導入することにする。（ｉ）Hornstein (1977)が述べているように，X̄ conventionの中において，SをVの何らかのレベルと同一視することは，まちがっているように思われる。(ii)JackendoffがとなえているようなDeverbalizing Ruleを，X̄ convention中で認めることは適切でないと思われる。

(25) Tensed Complenents (Deverbalizing Rule, Jackendoff, p.224)

$$V''' \rightarrow \begin{Bmatrix} \text{that} \\ \text{as} \\ \text{than} \\ \text{wh} \end{Bmatrix} - V'''$$

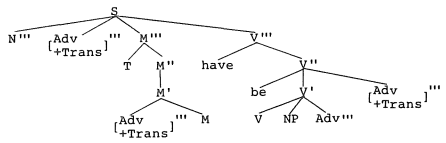
(25)のようなDeverbalizing Ruleでは，左側のV‴と右側のV‴が同価で，これは明らかにX̄ conventionの大原則であるところの，右側のものは左側のものより一つ価が下でなくてはいけないという原則に反している。(iii) S自体もX̄ conventionにうまいこと合致するように思われる。例えば，我々はChomsky (1976)において，$\overline{\overline{S}} \longrightarrow$ TOP-$\overline{S}$, $\overline{S} \longrightarrow$ COMP-Sというような句構造規則を持っている。さらに，Hornstein (1977,p.160)に示唆されているように，$\overline{\overline{S}}$（もしくはS‴）というnodeが設定されるかもしれない。そこで，次の例は，S‴を必要するように思われ，特に第１の例を表わすためには，おおよそ，S‴⟶ Pres-S″（ここで，PresとはPresentenceを示す）というような句構応規則を考えることになろう。

(26) $[_{S'''}[_{pres}$ By God$]$ $[_{S''}[_{Top}$ this desk$]$ $[_{S'}[_{S}$ I don't like$]]]]$

(27) Mary made the point $[_{S'''}[_{spec''}$ not only$]$ $[_{S''}[_{S'}[_{COMP}$ that$]$ $[_{S}$ John was a fool$]]$ $[_{spec''}$ but also$]$ $[_{S''}$ . . . $]]$

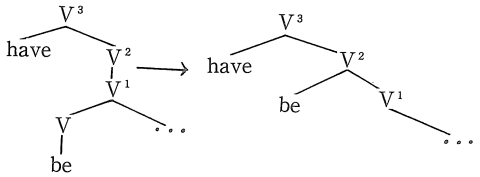
上のような修正に加えて，適切なmerely-class adverbの深層の位置を考えることによって，次のような副詞に関する句構造を立てることにする。

(28)



(28)において，Sに直接支配されている副詞，V″に直接支配されている副詞，V′に直接支配されている副詞，M′に直接支配されている副詞は，それぞれ，S adverb, VP adverb, strictly-subcategorized adverb, merely-class adverbということになる。Jackendoffの場合と同様，[+Trans]という素性をもった副詞のみが移動されることになる。(28)に加えてさらに，A,S,&Wの唱えているrestructuring rule(29)の１つとして，(30)のようなHave-Be Raisingというルールを設定する。

(29) Restructuring Rule (A, S, & W 1977)



(30) Have-Be Raising

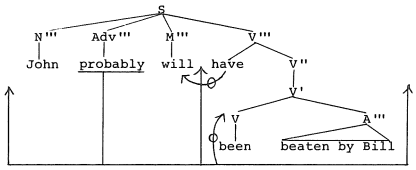
$$X - \left[{}_{M'}\triangle\right] - \left\{\begin{matrix}\text{have}\\ \text{be}\end{matrix}\right\} - Y$$

	1	2	3	4
→	1	2 + 3	ϕ	4

but, in some case, even if M′ is filled, *have* can be raised when *have* is followed by *been*.

句構造規則(28)と restructuring rule (30)が与えられたところで，はたして副詞の分布すべてを説明できるかどうか見ることにしよう。まず S adverb の場合について見ると，

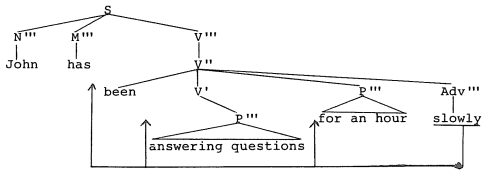
(31) S Adverb



(31)が示すように，S adverb はすべて可能な位置に現われることができる。さらに，modal がある時でも，Have-Be Raising を適用することを許さないような方言では，been の前に S adverb が現われることを許さないことが正しく予言されている。

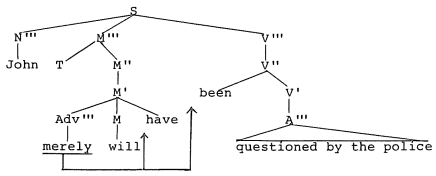
次に，VP adverb の場合をみてみると，(32)が示すように，VP adverb はすべて可能な位置に現われているようである。

(32) VP Adverb (after restructuring)



最後に，merely-class adverb の場合を見るわけだが，これには少しコメントを必要とする。まず我々の分析に基づいて，(33)の図が与えられる。

(33) Merely-class Adverb (after restructuring)



(33)においては，merely という副詞が 3 つの位置（すなわち，will の両側と have の後）に現われることが示されている。しかし，been の後にまた merely が現われることが示されていない。このことに対して，私は，Sag(1976, p.37)の次のような例を上げて，釈明する。

(34) a. They (simply) must (simply) have (simply) been (*simply) being (*simply) hassled by the police.

b. He (merely) has (merely) been (*?merely) walking the park.

(34)の例が示すように，Sag の方言では，merely-class の副詞が been や being の後におこるのを許さないようである。同様に，私が native speaker に判断してもらった結果も，同じであった。以上のことから，(1e) であげた Jackendoff らの例に関しては充分に説明できたとは言えないが，Sag や私が調べた native speaker たちの判断に関するかぎりは，merely-class adverb のすべての分布を述べたことになる。

以上要約すると，我々は(28)のような句構造規則と(30)のような restructuring rule を打ち立てることによって，一応すべての種類の副詞のすべての分布を説明したことになる。ただし，私は例え私の分析が，Jackendoff(1978)の分析に基づいて考えてきたからといって，Emonds や Culicover & Wexler の分析に基づいて，すべての副詞の分布の説明ができないと言っているのではない。しかし，明かなことは，まったく新しい分析を考えるのは別として，今まで考えられてきた数人の学者の説だけでは，すべての副詞の分布は説明できないということであり，もしそれら数人の学者の分析の修正案を考えるならば，我々の採った方法が一番すぐれていると思われる。なぜなら，我々の採用した Transportability は，可能な文法の観点から見ると，他の人に基づく数々の変形規則よりもその数において，非常に少なくてすむからである。さらに加えて言えば，まったく新しい分析のしかたといっても，今考えうるかぎりでは，私の分析よりすぐれたものができるかどうか未定である。

（これは，１９７８年10月１日岐阜大学での第31回日本英文学会中部支部大会で口頭発表したものに，加筆修正したものである）

（注）

(1)私は，ここでJackendoff(1972)の副詞の分類に基づいている。すなわち，S abverb(speaker-oriented adverb及びsubject-oriented adverb)，VP adverb（又はmanner adverb）とmerely-class adverb.

(2)彼らのいうtempral adverbとは，実際には，in the eastとかat 6 o'clockのような前置詞を示すので，ここでは扱わないことにする。

主要参考文献

1.Abe, Koo-ichi(1979) *A Study of −1y Adverbs,* unpublished M. A. thesis, Nagoya University.

2.Akmajian, A., S. M. Steele, and T. Wasow(1977) "The Category AUX in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry,*10,1～65

3.Culicover, P. and K. Wexler (1973) "Three Further Applications of the Freezing Principle in English," *Social Sciences Working Papers,*48.

4.Emonds, J. E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax,*Academic Press, New York.

5.Hornstein, N. (1977) "S and X′ Convention," *Linguistic Analysis,*3,137-176.

6.Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar,* M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts.

7.Jackendoff, R. S. (1978) $\overline{X}$ *Syntax: A Study of Phrase Struture,* M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts.

8.Keyser, S. J. (1968) "Review of Sven Jacobson, *Adverbial Positions in English,*" *Language,*44, 357–374.

9.Sag, I. A (1976) *Deletion and Logical Form,* unpublished doctoral dissertation, M.I.T.

（受理　昭和55年１月16日）